

お  
追  
い  
か  
け  
る  
瞳  
ひとみ

や  
ま  
だ  
山  
田

た  
か  
し  
孝

俺は昔、人には言えない特殊な癖があった。

それは、必ずいかような時であっても、目と目を合わせたくなるという衝動であり、目に対する狂信的なこだわりである。その原因はなぜだろうか。小学生の時の担任か、父親ないし母親が目を見て話さない人は信頼されないと刷り込まれたためだろうか。それとも、生まれてからそういう性分なのか。それを探る試みは無意味に近かったが、ともかく俺は眼球を覗く行為に異様なこだわりを持っていた。

思えばその悪習は、幼稚園の頃からだった。幼稚園で描いた母の肖像画は、グロテスクにも巨大な目玉が目に飛び込んできた。スケッチブックから一枚紙をちぎり、肌の色を不格好な鶏卵型に塗りつぶし、黒クレヨンをすり減らして大きな丸を二つ作る。よく見ればそれは不出来でしかも大きさはそろっていないかったが、その時の感覚ではそれが最高の写真だったのかもしれない。今になってそのような絵を描けば嘲笑われるだろうが、その絵は押し入れのどこかにひっそりしまわれているはずだ。

小学生になって、俺の癖は少しずつ日が当たるようになった。もちろん、この時の俺がそれを確固として自覚したわけではない。しかし、犬や猫、リスなどの動物を眺めるにしても、端正な毛並みや手足、顔立ちなどではなく目に興味を持った。動物たちの目は愛おしく、逆に担任や体育の先生の目は畏怖の対象であった。人並みにも小学生の時に初恋に落ちたのであるが、その決め手もやはり彼女の黒く澄み切った、気高く高貴な瞳であった。しかも、その相手の名前が『ひとみ』であるとききた。まさしく吸い込まれるように恋に落ち、そして破れた。しかしながら、それでもその美しさが欠けることはなく、むしろ崇高であった。誰に対しても慈悲を持ち、それでいて近づきすぎたものを丁寧に追い払う。まさしく孤高の花というに相応しい。

目に対する倒錯は中学、高校生活の中で初めて自覚することになった。一例を挙げるならば、他の学友が例えれば何かのアニメや漫画に夢中になっていたとして、人並みに同じくそのアニメや漫画を見ているかもしれない。あるいは、流行しているゲームを楽しむかもしれない。しかし、ひととき目に引き寄せられた。引き寄せられていることを否応なく理解した。友情物のアニメで、友愛に満ちた輝く瞳。スポーツ漫画の、熱血に満ちた眼差し。連続殺人鬼が出てくる映画の、冷徹で残忍な眼。それらにすべて打ち震えた。それは俺を見て、引き込むようだった。

そんな俺がオディロン・ルドンの絵に惚れこむのは当然で、代表作の『目||気球』や『キ

ユクロープス』の絵に倒錯するのも自然な結論だった。

特に、前者は言いようのない感慨を与えてくれた。やけにつやのある目を持つ気球は天を仰ぎ、天の描かれていない何者かを凝視する。一瞥するとそんな具合の絵なのであるが、その目は天を仰いでいるはずなのに、なぜか外から観察しているはずの俺も見られているように、視線を感じる。気球が運ぶものはベンジャミン・フランクリンのような人間の顔であることに気が付く。瞬く間に絵に引き込まれ、その絵に没入する。

大いなる曇天が空を覆い、鬱屈に地平線まで広がる荒野の中、一つの気球が飛び立っている。その気球には、飛ぶには釣り合わないように思えるほど重く巨大で透き通り、まだ生きてさえるような目が曇天に視線を注ぐ。まつげが目周りに生えそろう、気球は首を運ぶ。瞳孔と虹彩は半ば気球に隠れている。それがむしろ白黒の単純な絵に生々しさを与える。瞳孔は人のそれのように黒く、虹彩は茶色に見える。そのほかにも、フリーメイソンや米ドル札などに絵が描かれているプロビデンスの目に影響されてか、美術の時間で目の作品を作り上げた。

題名を『目神』といい、一面にでかかと眼球に黒牛のような黒い脚のようなものを四つ生やしている化け物が描かれている。足は稚拙ながらも赤紫や赤黒い血管や黄色い神経が浮かび上がる。背景は濃淡のある黄色をチョークで表現した。ちょうど頭に当たる右上側と左上側に伸びる脚の間の背景には星雲を模したエメラルド色に赤い星々が描かれ、その上にうっすらと神経のような黄色い糸や帯のようなものが描かれている。その絵は今にして思えば滑稽なほど下手なのであるが、それでも俺は気に入って枕元にその絵を飾った。同じく美術の時間で作った木枠に収められたその絵の枕元では案外よく眠れた。

俺はあの時間を生きている間の多くの時間を、目に割いていた。目以上に人体で優れている場所などないのではないのか。インターネットで探せばいくらでも出てくるような裸体より、その人だけの瞳、瞳孔に虹彩に、白目に白めに這う毛細血管すべてが芸術品だった。その輝きはまるで真珠やルビー、エメラルドで、繊細さは木材工芸品に近かった。

こうしてみると、それなりに中学・高校生活を楽しんでいるように思えるだろう。内的に、個人的な分では、豊潤なパラダイスで、十分に充実していた。ところが、外的な点においてはパラダイスというよりはむしろ、荒涼とした荒原に近かった。それは内的な目に対する狂信的な拘りのためでもあっただろうが、むしろそれは笑って済ませられる程度の、単なる一人の拘りだ。その点については大なり小なり、周りの人も了承していただろう。

むしろ、俺が考えるに周りの人が看過できなかったのは人の目を見なければ気が済まな

いという癖であろう。もしも言い訳がましく理由を求めるならば、人の目を見てちゃんと話すことが大切なのだとか誰かに教えられたからだが、実際のところは昔から目の美しさを求めるがために、無意識的にいかなる時もそうしているからだろう。たとえば、些細なことやふざけたことを話している時でさえ、あの時の俺はそうしていたのだから。客観的に見れば、それは何気ない話をしている時であれ、自分の目を凝視して話を聞いているのだから、それが真剣なのかそうでないのかも分からなくなってしまうことは今にしてみれば容易に想像できた。ともかく、そういうことで俺の評判は散々だった。ある人は話を真剣に聞いてくれるというが、ある人は何でも真に受ける堅物だと、またある人は気味が悪いと言いつつ聞いていた。その評判を知らないわけではなかったが、とはいえそれを基に戻す努力ということをするでもなく、それまで通りであった。

この頃の俺は毎晩毎晩、寢床に入ると同じ願いを抱きながら眠りについた。明日はもっと多くの目と、もっと素晴らしい目を見たい、と。

ある大学に進学してからも、俺は相変わらずだった。ただし、幾分か気が楽になった。今までのように狭い空間でなしに、孤独でいることを許されるからだ。誰かの目を見ることにふけていても許されるからだ。目の謎について考察していた。心理学部を専攻し、俺自身を目が魅惑する理由を探った。学友らがカラオケや合コンに行っている間も、目が魅力的な理由につながりそうな論文を読みふけていた。一年、二年、三年と次々に高度な知識を授業で説明していた。心理学に熱心な人は熱心に、そうでない人は居眠りしながら聞いていたが、俺の立場はそのどちらでもなかった。熱心ではあるものの、その熱意はすべて目に対して注がれていた。

四年生になって、私は四年間の勉強成果を提出した。テーマは『脳領域における人間の目の客観的観察による心理的影響について・および非人間存在の場合の違いについて』というものだった。審査をする教授は、多少の言葉の誤りを数点指摘し、あとは概ねその内容でいいと言った。けれど、その一方でその熱心さを、苦々しい笑いを浮かべながら『ある意味狂氣的であり、何かに憑りつかれているようだ』と評していた。俺と教授でよく話していたからであろうか。

研究についてはともかく、この頃は半ば狂気じみていた。自分の下宿先に搬入した勉強机の引き出しの中には、数十枚の写真が乱雑に入っていた。写真はすべて、どこかのフリール素材の写真を印刷したものだろう。被写体はすべて一人の人間で、年齢や性別、人種や

撮影場所もバラバラであったが、とりわけ被写体の目を見るために集めていた。年老いたトルコ女性の瞳も、ロシア少女の瞳も、モンゴル青年の瞳も、インドの料理人の目も、アフリカやオセアニアの若い労働者の目も、どれもこれもがそれぞれの味を出していた。それを見ていてだけで一日を過ごせさえただろう。いわんや、通っていた大学の人の瞳を見ることで時間をつぶすことも珍しくはなかった。癖はもはや中毒とさえ言えるほどに悪化していた。

だが、それでも悪くはなかった。実際問題俺が何をしているのかといえ、ただ瞳に未了されているだけだ。手のひらに乗るような眼球に、無限の情報が詰め込まれているようだった。それを見ればその人の印象がすべて浮き上がってくる。

ある会社に就職し、仕事に慣れてきた後もその悪習は変わらなかったが、その時、初めて味わう奇妙な感覚に苛まれ始める。

「まあ、今回はそんな大きいことにはならなかったからいいけどさ。けどこれもっと重要なプロジェクトでこれをやらかしたら、相当だよ。」小太りの部長は椅子に深く腰を掛け、問題になっている書類を見ながら言う。

「本当にすみません。残業中であまり細かいところまで気が回らなかったの。」俺は部長にもう何度同じようにやったのかは分からないが、例のごとく頭を下げた。

始まりは仕事のことと部長に叱責されていた時のことである。最近は何かとブラック企業が問題視されているからか、叱責といっても怒鳴りつけるとかではなく、淡々とたしなめていた。右も左もよくわからない新人だからなのか、回数について何回目かも分からなくなるほどに部長の机に呼び出されていた。それでたしなめるような叱責についても慣れしてきた頃である。

「だからあれほど関数の見直しはちゃんとしろと——おい、お前、ちゃんと聞いているのか。」

「ええ、もちろんですが。」妙な感覚に気を取られているのに気が付き、取ってつけたように慌てて首を縦に振る。

「そうには見えんがなあ。まあなんだ、お前が熱心なのは評価できるさ。ただ、こういう細かいところを怠る癖があるから——」

その形容しがたい感覚——あえて名づけるならば瞳が後ろから迫りかけてくるような——はしばらく背中に残っていた。その瞳を強いて言うならば、さも俺のように闇夜の

ような黒色の虹彩をした目であった。叱責が終わり自分のデスクに戻って水を一口か二口か飲み込んだ後、気が付けばその感覚は消えていた。それは、ある一刻の気のせいであると言い聞かせ、仕事に戻った。

それからまた、数日が経過してからのことである。いつも通勤に使うバスの中でのことである。外出をためらいたくなるような野外の熱気とは対照的に冷えたバスの中、優先席に座ってのことである。揺れに身を任せながら、昨日までの業務を思い出し、ため息をついた時だった。

「おじさん。おじさん。」黄色い帽子を付けた半袖のキャラクターが印刷された服を着た小学校低学年の男の子が声をかけて来た。

「……何だい？」おじさんといわれるほど年老いているのを気にしながら訪ねる。

「おじさん、そこって優先席なんだよ。おじさん座っちゃいけないよ。」小学生はどうやら、俺に説教をするつもりだ。

面倒なことになった。優先席は別に老人か妊婦の人が来た時にでも譲ればよいと思っていた。あの小学生は優先席があくまで優先されているだけであって絶対ではないというのを知らないのだろう。そのことを説けば面倒なことになる。と、怒鳴って彼を追いつ出すのも面倒なことだ。

「あー、実はな、俺は……。」

俺は、自分が人が人であるという嘘をつこうとしていた。といっても、誰かを傷つける気持ちはない。どうせ次のバス停で降りる。そういえば、小学生だって満足するし、俺も次のバス停まで騒がれずに座っていられる。誰も傷つきはしないじゃないか。

「俺は……」俺はそのあとの言葉を言おうとした。適当に心臓の病とでも言えばいいじゃないか。それを言えば、ほんの少し心地よい空間が待っている。

それを許さないように、その瞳はどこからか見ていた。いや、誰が見ているのかというのは愚問である。俺は彼の瞳に恐れを抱いている。彼の瞳は、俺が言い終わらぬうちにその嘘を喝破しているようである。

「……いや、なんでもない。すまないねえ。おじさんが間違ってたよ。それじゃあ、どこからね。」

俺はこのようにひねり出すのが限界だった。あの瞳は何だ？あの得体のしれない瞳は。瞳は死人のように冷たく、俺を冷ややかに見つめていた。

あの子供がどんなことを言っているのかなんて、まるで覚えていない。言いようのない居心地の悪さが、俺を立たせた。バス停まではまだ距離があるというのに、俺は運転手の隣に立った。誰かに見られている、誰かの瞳が私を追いかけているという感覚を、この瞬間はつきりと認めた。否定しようにも、誰かに見られている気分はまだ残っていた。

俺は恐る恐る、運転手の目を覗いてみた。初老の運転手で、髪には白髪も混じっていた。彼は前を見て、安全運転を心がけている。しかし確かに、俺を見ているような気がした。何かを訴えかける眼差しを、俺に対して送ってきている。俺は小銭で荒っぽく支払うと、滑り落ちるようにバスを降りた。

バス停から会社まで、歩いて五分もかからない。本来ならば、特別急ぐ事情もないのだからゆっくり散歩をするようになっていた。そうしなければ、俺の心は狂気に蝕まれていただろう。中学生か高校生の時に、反薬物乱用防止キャンペーンの時に見た、幻覚作用そのままであるかに思えた。どうか、それがひと夏の——この時点で既に大暑を超えていた——燦然ときらめく太陽の熱にあおられての幻覚であることにしなければならなかった。あるいは妥協して、なにがしかの食べ物に大麻が混入したということにでもしてほしかった。そうすれば、あの瞬間でもう終わると、こうしてゆつくりと会社に向かう道で、あるいは道中の木陰で収まるのが期待できるのだから。

だが、そうなってはくれなかった。あれは幻でも空想上のもものでもない。あれは現実だ。リアルだ。本物だ……。俺の対角線上を歩く会社員の女性も同じ瞳を持っている。その後ろを颯爽と追い抜いたランナーも、やはり同じものを持っていた。あるいは、日に照らされたベンチから逃れて木陰で涼んでいる浮浪者も、やはり同じだ。

それを知った瞬間、俺は膝から崩れ落ちそうになった。レンガ道に膝を付けてスーツをダメにしてしまいそうだとか、周りの好奇や不安の視線を受けることだとか、この際どうでもよかった。どうせ、みんなが俺を見ていることに変わりはないのだから。今更どうして羞恥やら世間の目だかと恐れおのけようか。それよりはるかに恐ろしいものが、俺の行動すべてを見つめている。それはいい育ちの小学生に嘘をつこうとした瞬間の俺の表情や、部長の説教をいい加減に聞いていたあの瞬間の態度。それだけではない。それ以前についた秘かなる趣味を覆い隠すような取り繕うための趣味をひけらかした時に見せたあの傲慢、それから人の目を見つめていた時に適当に返事をした時の足の組み方。果ては趣味がばれそうになった時の昂る鼓動。それらがすべて、白日の下に晒されている気がした。

俺を見つめて、追いかけてさえ来る瞳は、それが周知の事実であることを訴えかけていた。

その瞬間、俺の足取りはますます早くなつた。とにかく早退しなければならぬ。自分の社内における立場は十分わかまえてはいるが、それでも最低限休職届、最悪の場合辞職届を出すほかにあるまい。世間一般の深刻な事態がそれだとすれば、この瞬間はそれよりもはるかにひどい。俺の秘密が、俺自身でさえ危ない橋を渡っているように思えた悪習が、この瞬間、言葉通りに全世界に広まったのだ。そうであるならば、俺の目に対する異様な執着、衝動は呪詛であろうか。そんな真似さえしなければと思えば青ざめるような光景が、何百何千と脳裏で回想させられた。思い返したくなくても、ナイフで古傷をえぐられるように勝手に思い返させられた。

俺は人生で初めて、俯いたまま出社した。晴れの日も雨の日も雪の日も、いやなことがあつた時もうれしいことがあつた時も目から目を離そうとしなかつたのが、今やタイムカードを打刻するために一瞬だけ視線を上げるときに目があつてしまふのではないかと恐怖した。幸い、社内の中では比較的早くに出社する習慣だからか、ついに目が合うことはなかった。

デスクでうつ伏せになり、部長が来るのを待つ。その間も瞳は後ろから追いかけて、弱り切った背中を憐憫の目で見つめる。その目がむしろ、不徳を一層強めて責め立てる。罵倒されて殴られるよりおぞましい拷問だ。鳥肌は絶えず止まらず、エアコンは修理に出されているはずなのに冷凍室に放り投げられたかのような痛い寒さに、神経は病む。秒針が一つ、また一つと動くたびに、五臓六腑は氷がめり込んだような感覚に襲われる。

部長が定刻に出社し席に着いたときに、ようやくそれがほんのりと和らいだ気がする。俺は反対の席でマインスーパーをしている同僚が手を止めるほどに勢いよく体を上げると、獲物を見定めた猫のように部長席へ歩み寄る。その間何遍もその説明文が思い浮かぶが、そのたびにそれがすべて霧消する。その間、絶えず瞳が周りを追い回している。

「どうしたんだね、そんな顔をして。」部長は激怒しているかのような深く刻まれた眉間のしわに当惑しながら訪ねる。

「実は部長に相談がありました。」

「なんだね、例のプロジェクトのことか？あれはお前にはまだ早すぎるし、第一仕事が終わっていないじゃないか。」

「いえ、違うんです。部長。」一つ眉間のしわが増えた後に、俺は簡略な説明をした。無論、瞳が追いかけているからなどといえば気が動転しているのではないかと疑われかねない



め、それらしい言葉を用意する。仕事の量の多さとか、あまり慣れていない飲み会での一気飲みの風習などとか、家の事情とかをそれらしく並べ立てた。それまでは辞職まで踏み込む勇氣はなかったが、この際どうでもよかった。必要なのは、あと一押しのはずだ。「しかしねえ、君。」一通り俺の作り上げたストーリーに耳を傾け終わった部長は、未練がましく言い返そうとする。

部長は一般的な世間の感覚では、部下を思いやって時に丁寧な叱り、時に檄を飛ばす人間の鏡のような人柄である。飲み会なんかでその話をすれば、他の部署で務める同期の間は、そのような部長であったら、などと嘆息し自分の部長がいかにも悪いかなどあげつらう。それほど慕われている。

だが、だからこそ俺を苦しめる理由になる。それならむしろ部下に対して何の興味もないような部長のほうがはるかにやりやすかった。こうもぐずぐずと悩むこともなかった。瞳に追いかけることもなかった。やさしさは時に人間をも殺すなんて誰が考え付くのか。そしてそれが実際に起きています。

「部長が慮ってくれるのは大変痛み入ります。しかし……。」俺は必死に口先で平静を取り繕う。

だが、ついにその先の言葉が止まった。

オフィスのほぼワンフロアすべてを覆いつくすようなあの瞳が、俺を見ていることに気づいたとき、俺は自身の体の隅々まで流れている血液が、すべて凍って固まった。レンガ道から耐え忍んでいた膝の揺れは、ついに決壊した。無数の視線の中で、俺は崩れ落ちた。

あれから俺があのかを辞めるまでは、さして難しくなかった。医者からは疲労が原因だといわれ、問診の後にしばらくの療養と幾つかの精神に作用する薬を勧められた。それが原因であれそうでなかれ、ともかくそれで会社を辞める正当な理由ができた。そして、しばらくの手続きの後に、無職になった。

幸い、目の執着のほかにはあまりお金がかかるような趣味を嗜んでいなかったから、再就職するまでの生活費は工面できそうだった。けれど、反面外に出るような趣味もなかったがために、しばらくひきこもるだけ生活が続いた。

ひきこもる生活は、初めはそれこそ極楽のようなものだった。あの忌まわしい瞳を見なくて済むのだ。誰かと出会えば、否が応でもその瞳を意識しなければならぬ。その点、ネットの世界ではあまり見る必要もない。

だが、それが砂上の楼閣であることは、目を追うごとにその瞳の存在が波のように押し寄せてくる事実を前に残酷なほど明らかになっていった。

あの瞳は何だ。一見すればどこにもあるような目であるというのに、あの邪悪さは何だ。あれ以上に醜悪な目を見たことがあるか。人の悪しきところを鋭く暴き、晒し出さんとするゲスの目だ。それだけでなくあらゆるものが浮かび上がっている。蔑み、妬み、憤怒、悲嘆、畏怖。そういったものがぐちゃぐちゃに固まっている。その中にはむしろ、聖のものというべきか、例えば慈しみというようなものさえ入っているようで、おぞましいカオスの目なのだ。

俺の部屋から瞳にまつわる要素はすべて排除された。写真もアルバムも、目の絵もすべて捨ててしまった。スマホの壁紙も何の変哲もないミニマリスト的な緑色の背景にしたし、学生の頃に書いた論文は紙媒体、USBメモリのデータも含めてすべて削除してしまった。今やそれは論文でも何でも無い、ただ俺を呪うための呪詛が書き連ねられた怪文書に他ならなかった。

それらをすべて捨てても気休めにしかならなかった。見られている感覚は絶え間なく、四方八方から続き、寧ろ増大している。今や最低限の食料を買い込む時のレジも、あるいはデリバリーで頼んだものを届けてきた人にせよ、あの瞳が追いかけてまわしている。

ああ、何という地獄だろうか。仮に俺が目を失明させたとしても、それは永遠に追いかけてくる。それがこの世で目をとかく溺愛し、それに人生を捧げようとした人間の末路だとでもいうのだろうか。それはつまり、俺の人生そのものの全否定そのもので、死である。

だが、俺自身が死ぬのと比べればはるかにましだ。こんな精神的狂気に逃れられるならば、それまでの人生を棒に振ることだって厭わない。それで俺というものが新たに生まれることができるならば。

それから俺は、寢床に入る度に同じことを願った。もう二度と目を見なくて済むように。かつて思っていたことなど、忘れることにした。

さて、そんなある夜のことである。行きつけのコンビニへ足を運び、翌日の朝食まで買出しをした時のことである。同じ時間に来ているため半ば顔なじみのような、それでも目がある顔を見られないため半ば初めてのようなその店員が無機質な声でいつものように質問をした。

「箸は要りますか？」

「あ、いいです。」そう言っついても通り袋を受け取ろうとした、その時である。瞬間、俺の手と店員の手が触れた。

「あ、すみません」と店員。イレギュラーなことで思わず顔を上げる。

その時、俺はその店員の顔から眼が消えていることに気が付く。厳密には目そのものが消えているのではない。目の全てに霞がかかったような白目になり、そこに俺の恐れていた黒目を確認することができないのだ。

「あ、大丈夫です。」俺はそそくさと袋を掴むと、同時間帯に他に来た客の顔を横目に見た。やはりそこに、恐れていたその目を見ることはできなかった。

俺はすぐさま自宅に戻り、いくつか人の顔を見る。やはり、目を見ることができなかった。そして、ふと部屋を見渡す。俺を追いかけてきていた瞳は、どこかへ行ってしまったようである。

その後の俺は、それまでが嘘であるかのように回復していった。ハローワークに通い始め、それまでの経歴を生かせそうな職業を探した。以前の会社ほどではなかったが、それでも再就職するにはふさわしいような条件の会社に入社することができた。相手の目が見えないことも、回復してすぐは戸惑うほかになかったが、けれども一か月、二か月ほどもすればあの邪悪な、追いかけてくる瞳に心の底から凍り付くことを思えば、大したことはなかった。

俺の人生はこうして回復した。俺を恐れさせるものから、紆余曲折こそあったものの、逃れることができたのだ。

俺は今、今の会社でできた同僚と喫茶店で昼食を楽しんでいる。ビル街の中にひっそりとある、古めかしい店だ。同じコーヒーを頼み俺はカレーを、同僚はナポリタンを食べている。

あの瞳におびえる前は魅了され食事どころではなく、おびえた後はそれから逃れんと思えばかりで、やはり食事を楽しむことはできなかった。今、こうして同僚の白く霞んだ目を見つめながら、何でも無い話に花を咲かせることができる。話の内容は、当たり障りのない世間話だったり、趣味の話だったり。半ば社交儀礼的なもので、昔の俺ならそれよりも大事な物事があったから退屈でならなかっただろう。

しかし、今の俺にとっては何れほど甘美なことか。どれほど当たり前前に楽しむことが、どれほど退屈なことか。それが素晴らしいことなのか、かつて目に対する狂信的な執着に占め

られていた心の芯に澄み渡ったように思える。そこに俺の平静が、俺の日常があることに、今更気が付いた。

「ははは、お前ってそんな趣味があつたんだな。」同僚は軽く笑いながらそういうと、巻き取られた赤いパスタを口に運んだ。趣味というのは、目のことではない。目のことを隠すために尤もらしい虚偽の趣味である、アニメのことだった。もつとも最近は、虚偽だとかそういうことをあまり気にせず鑑賞することができていたため、それなりに話を合わせることができる。相手だって、そこまで詳しく話すほど興味はない。

「ああ。意外かもしれないけど、前からそういうのが好きでね。それで君の趣味っていうのは何だったっけ。」

「ドライブ。案外ドライブっていうのが……。」彼が何を言っているのか細かく覚えていないし、俺の返事も話を少し広げる程度の差しさわりのないものだっただろう。何より、俺にとってはそんなことがどうだっていい出来事だ。

また、誰かが見ている。あの瞳が俺を追いかけている。それも、すこぶる至近距離で。俺はあたりを見渡した。ここにいる客も、店員やオフィス街の通行人も皆、目を白く塗りつぶされている。それでは、これはいったい誰の瞳なのだろうか。反動で椅子が倒れそうになるくらいの勢いで立ち上がる。

「お、おい、どうしたんだ。」後ろで同僚が何かを言っているようだが、俺にとってそれは関係がない。

俺はお手洗いに向かった。そこに俺を追いかけていた瞳の正体が潜んでいると明らかになるであろうから。男女の暖簾が分かれているトイレの手前、洗面所があった。鏡を覗く。

「ああ、俺だ。俺を追いかけているのは俺の瞳だ！」

了